搾り取られ専門サークル
drain
30歳童貞、
サキュバスを召喚したら
赤ちゃんプレイを強要された。

童貞のまま30歳を迎えてしまったマゾたちへ。

童貞で30歳を超えると魔法が使える？

そうね。召喚魔法が使えるわ。

でもコストがかかるわよ。

具体的に言うと、魔力を代償として払ってもらうわ。

魔力がない？

仕方ないわね。

それなら代わりのものをもらうわ。

貴方の精液をね

「へー、30歳で童貞のままだったんだぁ」

「だからって二人も女の子を召喚するなんてどうかしてるわ」

「・・・あの」

「あーはいはい。わかってるわよ。お金も魔力もないんでしょ？」

「でも召喚されておいて何も持って帰らないわけにいかないわ。
いいわ。精液で我慢してあげる」

「精液も精製すれば魔力になるしね！」

「じゃあ、早速始めましょっか❤ 」

「童貞マゾ。パンツを下ろしなさい」

「やだ！ 亀頭から下に皮が下りないんだけど…」

「クスクス。こんなおチ〇ポじゃ女の子は抱けないよね」

「ねえ、ママ以外のおっぱいを見たのは初めて？」

「リアクション見るとそんな感じね。クスクス」

「じゃあ、まずはWおっぱいを堪能してもらいましょうか」

「・・・あっ！」

「クスクス。まだおっぱい当てただけよ」

「オチ〇チンがもうビクンビクンしてる」

「搾り尽くすからそのつもりでね❤ 」

「おっぱい・・・見ていいのよ」

「言う前にもうクギづけじゃない（笑）」

「このスベスベでツヤツヤで柔らかくて・・・」

「それでいて暖かい。おっぱいに包まれて・・・」

「天使のサキュバスのおっぱいでモミュモミュ❤ 」

「悪魔のサキュバスのおっぱいにシコシコシコ❤ 」

「はい。射精3回め～」

「だいぶ力が抜けてきたわね」

「あー、もうおチ〇ポでしかモノを考えていないよ、コイツ」

「自分で召喚したサキュバスに、
こんな簡単に快楽で負けちゃうんなんて…」

「情けな～い（笑）」

「クスクス」

天使のサキュバスと悪魔のサキュバス。
自ら召喚した二人のサキュバスから
毎日パイズリされ続けて1週間が経ち…

「だいぶ精神が幼くなってきたわね～」

「おチ〇ポも小っちゃくなってきたしねー」

「男は皆、おチ〇ポ搾られると精神が幼くなってしまうのよね―」

「いやいや、それってあたしらサキュバスのせいだから（笑）」

「・・・あっ！・・・あっ！・・・あっ！・・・あっ！」

「よちよち❤いい子でチュね～。おねんねしましょうね～」

「ミニサイズ貫通型オナホにチ〇ポがすっぽり埋まってるとか
男としてあり得なくね？」

「・・・あっひっ！」

「まあ、チ〇ポが小さくなったのも
アタシらのせいなんだけどね～」

「クスクス。あ、また出た。
おチ〇ポが小っちゃくなってるから分かりにくいね」

「おチ〇ポシコシコしてくれた悪魔のお姉ちゃんに
お礼を言いまちょうね～」

「あ、ひっ！」

「お、又出た。もうパイズリじゃなくても問題ないな。
・・・童貞マゾは」

「折角魔法でサキュバス呼び出したのに、
マ〇コは味わえそうにないわね。クスクス」

精神が退行し始め、おチ〇ポも縮小してしまった30歳童貞マゾ。
ますます進む退行。
精液を搾り取られ続けて一夜明けると・・・

「全く！全くもう！」

「30歳童貞のくせにおねしょだなんて。クスクス」

「ひ！やめて！お尻叩かないで…」

「オシッコ漏らしたんだから、
お尻叩きは当然でしょ！？」

「ほら、こうして太ももの裏で
足を挟めば抵抗できないでしょ？」

「やめ・・・やめて・・・お尻叩きなんて・・・この年齢で・・・」

「ダメよ」

「しっかりお仕置きをうけましょうね～」

「右のお尻は悪魔のサキュバス」

「左のお尻は天使のサキュバス」

「両方ペチペチ叩いてもらいましょうね～」

「あああっ！」

「お尻ペンペン、
今日は童貞マゾの年齢と同じ30回よ！」

「あああああああ！！！！」

「お尻ペンペンされて恥ずかしくないの？クスクス」

「もう！反省！反省しなさい！」

パーーーンパーーーン！

「やめて！もうやめて！」

「やめて？”やめて下さい”じゃなくて？」

「全く。言葉遣いもなってないようね」

「クスクス。今日から”躾”が厳しくなりそうね（笑）」

パーーーンパーーーン！

「痛い！痛いよ！」

「当たり前でしょ！？」

「簡単に許してもらえると思わない方が良いと思うよ」

「おねしょした童貞マゾは、
お尻叩きを受けるんです！」

「お尻叩きが終わったら、
お布団が乾くまで裸で立ってるんだよ。
お尻出したままでね。
私達が真っ赤なお尻を観察できるように・・・ね」